

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2670200480		
法人名	社会福祉法人健光園		
事業所名	十四軒町グループホーム(2階)		
所在地	京都府京都市上京区千本出水下る十四軒町398番地		
自己評価作成日	平成23年2月1日	評価結果市町村受理日	平成23年6月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・建物およびフロアは木を多用した、安心感を抱く空間になっている。台所やリビングでは食事毎に調理の音や匂いがするなど、ご利用者が落ち着いて過ごせるよう、家庭的で馴染みのある雰囲気作りを心がけている。 ・西十四軒町自治会員として、区民運動会やバレーボール大会・ソフトボール大会などに参加している。また、自治会地蔵盆・餅つき大会等を当事業所で行う事で地域の一員として自然に交流している。 ・ご利用者の生活歴や好みをご本人・ご家族等から情報を頂き、センター方式シートを活用する事により、日々の生活やケアプランに活かせるよう職員間で情報を共有する努力をしている。 ・1階玄関は防犯上夜間は施錠しているが、日中は全ての玄関を施錠していない。外出の希望があれば職員が同行し、安全に帰園いただけるよう連携・工夫をしている。
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://kohyo.kyoshakyo.or.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2670200480&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 市民生活総合サポートセンター
所在地	〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目4番17号 千代田第1ビル
訪問調査日	平成23年3月25日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>当該ホームは「大切な人にこの場所を・・・」と職員の思いを込めた理念を掲げ、日常的にゆったりと過ごす中で、利用者の思いの把握に努め、個別対応を基本として希望にそった支援を心がけています。十四軒町の自治会員として行事に参加するだけでなく、事業所主体で自治会行事行う等、地域の一員としての役割も果たしています。ホームでの避難訓練には多くの地域の方に参加頂き、AEDの設置場所としての認識も得られ、相互の信頼も深く良好な関係が築かれています。職員は法人内外の研修を受講する機会が多くあり、学んだ事は日々のケアに活かせるように努力しています。家族への報告は来訪時に直接伝えたり、毎月送付する個別の手紙は、写真入りで日常の様子や医療面での報告等詳しく記入し安心に繋がっています。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	十四軒町の家理念 「大切な人にこの場所を…」職員全員で考えたこの理念は十四軒町の家 運営会議・グループホーム会議・職員全体会議 上記の会議内や新人研修・勉強会において理念を共有している。	開所時に職員中心で考えた「大切な人にこの場所を…」との理念を掲げ、住み慣れた地域で暮らし安心な生活を送ることができるように支援している。また、会議や勉強会では職員が理念を共有しているかを常に確かめている。また各種の書類に理念を印刷して、日常的に意識付けると共に、配布することで家族や地域の方々に広く理解を得られるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	日頃の挨拶をはじめ、西十四軒町自治会員として、区民運動会やバレーボール大会・ソフトボール大会などに参加している。また、自治会地蔵盆・餅つき大会等を事業所で行う事で地域の一人として自然に交流している。イベントなど特別な時だけの付き合いではなく、古紙回収・回覧板など日常的な「ご近所づきあい」にも努めている。	地域で開催される、区民運動会やバレーボール大会、ソフトボール大会等には職員が代表として参加し、利用者応援に来るなどの交流がある。ホームで行う自治会の地蔵盆や、餅つき大会には多勢の地域からの参加がある。また、小学生の来所があり茶道のお点前を披露して利用者からは喜ばれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議において当事業所の取り組みを報告するだけではなく、児童民生委員・自治会長・地域包括支援センター職員と情報を共有し、地域の相談窓口として事業所があることなど、共に地域貢献に向けての話し合いに努めている。また、認知症あんしんサポーター養成講座の講師・スタッフに職員を派遣し、実践内容等を一般の方々に伝える活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議ではご家族・ご利用者・自治会長・児童民生委員・地域包括支援センター職員・事業所職員がメンバーとなり事業所からの報告だけではなく、地域の方々からの情報提供や事業所へのアドバイス、指摘を頂き、サービスの質の向上に向けての取り組みに活かしている。また、異なる立場の方々にはメンバーとなっていただくことで、様々な角度からご意見を頂ける、貴重な機会となっている。	家族、利用者、民生委員、地域包括支援センター職員等の出席のもと、併設の小規模多機能事業所と一緒に2ヶ月に1回開催している。行事や利用状況の報告を行い、出席者からの意見や情報等は業務に反映してサービスの質の向上に繋がっている。同時に食事の試食会を行い、ホームを知ってもらう機会となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	上京区事業者連絡会や区役所担当課に適時相談・確認を行っている。また、地域包括支援センターとは2カ月に1回の運営推進会議の他にも、地域ケア会議の場所を提供するなど、積極的に連携を図り、サービスの質の向上に取り組んでいる。依頼があれば、勉強会・研修の講師等の派遣にも積極的に対応している。	区の連絡会に参加して情報を得たり、行政の担当者に相談をしてアドバイスを受けている。また行政から質問や要望があった場合には参考になるようなアドバイスや意見を出す等、行政からの信頼も得ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内および事業所内で、各年1回以上の研修を実施しており、身体拘束について、管理者・職員が学ぶ機会がある。1階玄関は防犯上、夜間は施錠しているが、日中は全ての玄関を施錠していない。外出の希望があれば職員が同行し、安全に帰園いただけるよう連携・工夫している。施錠しないことで無断外出や事故のリスクがあることも全職員が認識し、必要であればご家族にも協力をいただき、安全を重視しながら、鍵をかけないケアの実践を努力している。	終日ユニット入り口の施錠はしておらず、玄関は夜間のみ防犯のため施錠をしています。外出傾向の人のパターンや雰囲気を知り、職員が同行する事で閉塞感のない自由な生活を支援している。法人で年1回以上実施する研修の中で言葉の抑制等についても勉強する機会があり、職員間で共有している。	

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内および事業所内で、各年1回以上の研修を実施しており、高齢者虐待防止関連法について、管理者・職員が学ぶ機会がある。介護現場では、日頃のケアについて振り返りのカンファレンスを行うことによって、虐待が見過ごされていないか注意を払い、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内研修にて年1回実施しており、権利擁護に関する制度について管理者・職員が学ぶ機会がある。また、外部研修にも積極的に参加し、知識を深める努力をしている。必要とされるご利用者へは、管理者・職員が連携し、研修で学んだ知識を活かし、求めておられる情報を提供し、支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の事前面接ではご自宅へ赴き、施設についてご説明し、ご利用者・ご家族等より不安・疑問点等を確認している。さらに入居時の契約を結ぶ際は、契約内容を確認いただき、再度不安点などをお伺いできる機会を設け、理解・納得を図る努力をしている。また、解約をされる際にも、ご家族等へ来園頂き、十分な説明ができる機会を設けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	各フロア玄関に意見箱を設置すると共に、重要事項説明書へ法人内の苦情窓口の連絡先・担当職員や第三者委員の連絡先・担当者名、外部者へ相談できる旨も記載し、事業所内に掲示している。運営推進会議ではご利用者より改善してほしい事などを聴く機会を設け、積極的に対応できるよう努力している。いただいた意見や不満等は職員内で振り返りを行い、質の向上に活かしている。	各ユニットに意見箱を設置している。面会時に得られた意見、要望は記録に残し、速やかに職員間で改善策を話し合い返答している。解決が難しい内容であれば法人の協力を得て対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	十四軒町の家 運営会議・グループホーム会議・全体会議にて職員の意見を聴く場を設けている。また、個別の意見を聴く場として管理者によるヒヤリングやフロアリーダーによる日常的な聞き取り・意見交換等を行っている。	日常的に管理者、ユニットリーダーに意見や要望を表しやすい環境にあり、全体会議等でも話し合う場を作っている。改善策等は連絡ノートに記録し、欠席の職員にも確認出来るシステムになっている。又、会議に参加できない職員は前もって意見を提出している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者によるヒヤリングにて職員の思いや希望を把握し、研修調整などに反映している。また、職員より研修参加の希望があれば、意向に添えるよう勤務調整をし向上心を尊重できるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人では年間計画を立て、職員の経験段階に合わせた研修計画を作成し、職員が研修を受ける機会を設けている。事業所内でも年間計画を立て、多くの職員が参加できる機会がある。外部研修については案内を全職員が確認できる場に掲示し自主的な研修参加を促している。また、資格取得に対しても勉強会や講習会への参加をサポートする体制がある。		

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	行政区内、近隣の事業所とともにネットワークを作り、認知症サポーター養成講座を開催している。また、グループホーム部会に参加し、勉強会や意見交換を行い、双方の事業所のサービスの質を確認・向上に努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接の際にご利用者の意向や入居してから望まれている事、続けたい事、して欲しくないことなどを確認する機会を設け、ご利用者の思う生活に合わせたサービスの提供がスムーズに行えるよう努めている。また、入居後もマンツーマンでゆっくりとお話を聞かせて頂く時間を大切に、その思いを職員間で情報共有するよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談を受けてから事前面接までの間は電話にて現在の状況やご家族等が困っておられる事を確認している。事前面接では自宅に訪問し、ゆっくりとお話を聞くことで、入居後に求められているサービスの確認を行っている。契約はホームで行い、再度不安やニーズを確認するとともに、ご本人がおられない場所で聴く機会も設け、話しやすい環境づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談を受けた時は管理者・リーダーに報告し、早急にカンファレンスを行い、ご家族・ご利用者が求めているサービスが何であるかを見極める機会を設けている。また、必要があれば関係機関や他サービス事業所とも調整を行い、スムーズにニーズに応える事が出来る体制を整えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	コミュニケーションによる情報収集を大切にし、ご利用者が持つておられる力、得意な分野を把握できるよう努めている。その上で、可能な限り、生活面でご利用者と職員が共同作業を行うことで、「介護される」「介護する」という関係ではなく、「共に生活をし、支え合っている存在」であることをお互いに認識できるよう努めている。また、センター方式シートを導入することで利用者主体の視点を持つように努力している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	事業所はご家族と共にご利用者を支える支援者である事を意識し、ホームでの暮らしの様子についてのご家族の不安等を早期に解消できるよう心がけている。定期的な書面での報告の他、必要時にこまめな情報提供と相互の連絡を取り合う事で、ご家族の意向や思いを確認し、安心してご利用いただけるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前の事前面接では馴染みの場所・人などの情報を収集しご入居後も関係が途切れないよう支援に努めている。実際の介護現場でも以前住んでいた所へ帰ったり、馴染みのお店、お寺へ出掛けたり、一人ひとりの思い出の場所に向かう事が出来る体制を整え、入居後も地域の一員として暮らせるよう支援している。	以前から通っていた美容院へ行ったり、住んでいた場所を見に職員が同行している。遠方の家族の訪問時には、ホームに泊まって頂けるような支援もしている。サービスを受けていた他事業所からの友人の来訪があったり、信仰しているお寺に通ったり、家族と一緒に以前からの絵画教室での稽古を続けている方もいる。	

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者一人ひとりの希望や認知症状を把握した上で、自然に関われるよう必要時に職員が介入し、お互いを理解していただけるよう努めている。また、ご利用者の好きなこと・得意なことを日頃の会話の中で情報収集を行い、出来る事を見極め、役割を持っていただくことで孤立せず、ご利用者同士が支えあって生活できるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時にご家族の了承を得て、定期的に面会へ行き、病状の確認とサービス継続を選択して頂けるよう努めている。また、面会時に様子をご家族に報告することで、共に考える機会を設けることで、安心感と信頼感を深める努力をしている。また、契約が終了したご家族が記念日や行事に立ち寄ってくださるなど、継続的な関りを大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご利用者の意向、暮らし方の希望について、入居前の面接時に聞き取り、面接票に記入している。入居後はセンター方式を用い、生活歴や日課の希望を確認し、意向に沿ったケアプランを作成し、実施できているか毎日確認している。また、職員一人ひとりがご利用者の暮らしが本人本位であるかを意識することで、希望を伝えることが出来ないご利用者の思いを把握できるよう努めている。	入居時の面接や、家族からの情報を得て生活歴や好み等を把握している。要望の把握が困難な方には、日常的に寄り添う事で、本人の行動や何気ない言葉を拾い、考察する事で思いを把握できるよう努めている。把握した事柄はセンター方式を用いて収集し記録し職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前面接の際に、ご本人・ご家族・担当ケアマネジャーより情報収集をしている。入居後はセンター方式を用い、ご利用者・ご家族・面会に来られた方からの日常会話の中で、今まで馴染まれていた生活の様子を話していただけるよう、関係作りに努めている。得られた情報は記録し、職員が共有できるよう努力している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	事前面接時および入居後の日々のケアの中で、一人ひとりの生活習慣についての情報を得られるよう、努めている。また、生活場面を通して、各種作業をすることでその方が持っておられる力を見出し、日常生活に活かしていけるよう努めている。その情報は日々の記録やセンター方式シート等に記載し、職員が共有できるよう努力している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画作成・更新時にはご利用者へ生活場面での希望や意向を確認することはもちろん、ご家族へは希望、意向を確認する他に、ケア場面での工夫するポイント「家ではこういう風にすればうまくいった」などのアドバイスをいただき、ケアプランに反映している。また、必要時には関係者(医療スタッフ・福祉用具等)とも話し合いを行っている。	センター方式を用いてアセスメントを行い、利用者、家族の希望を取り入れ、職員の意見を出し合い介護計画を作成している。6ヶ月ごとに見直している。	見直しの際に把握した利用者の思いや要望の変化等について介護計画に反映されていますが、今後更に介護計画に反映されることを期待します。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	パソコンでの介護記録ソフトを活用し、日々のご利用者の生活・医療面やご家族との連携等の記録を管理している。新たな実践を行う場合は、必要に応じて個別の書式を作成し、実践・結果を記録するよう努めている。その情報は介護計画のモニタリングに活かしている。		

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々変化するご利用者・ご家族の状況を把握するよう努め、施設内他部署への定期的報告に加え、必要時には随時、相談・連絡を行っており、変わりゆく状況に柔軟な対応が出来る体制を整えるよう努力している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ご利用者が、地域の一員として生活するうえで、その意向に合わせ、地域の防災訓練や行事に参加いただいている。また、運営推進会議には自治会長・民生委員の参加もあり、共に協力しながら支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事前面接の際に、事業所協力病院の往診を受けるか、現在のかかりつけ医の受診を継続されるかの意向を聞いている。入居後も変更は可能である。長年診にいただいているかかりつけ医を選択された場合は、受診時の情報提供や、必要があれば随時、連携をとりご利用者を支えている。精神科・歯科など、専門科のかかりつけ医をもっている方もいる。	入居時にかかりつけ医を継続するか、協力医の往診を受けるかの意向を聞いている。家族との通院の際には職員も同行し、直接医師に状態を報告して指示をもらっている。必要時には歯科等の受診も支援している。訪問看護とは24時間連携体制にあり、緊急時には適切な医療が受けられる体制を整えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	提携している訪問看護ステーションより、週に1回看護職が来園し、健康管理を行っているとともに、24時間看護職と連絡がとれる体制を整えており、緊急時にも対応できるよう努めている。他には併設する小規模多機能ホーム、デイサービスの専属看護職員へ些細なことでも相談できる体制があり、看護職と協働しご利用者を支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ご利用者が入院した際は、入院先の担当医・病棟看護師・相談員と連携をとり、情報交換が密にとれるようつとめている。また、病状の変化やご本人・ご家族の希望その他、必要時には、担当医・病棟看護師・相談員・グループホーム職員そしてご利用者・ご家族を含め、カンファレンスを調整し、早期退院へ向けたアプローチをしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に当グループホームでの『看取りの指針』をご家族等へ提示し、終末期のあり方について希望を確認している。ご家族等からの希望や必要時、主治医・看護職・施設職員そしてご利用者・ご家族との話し合いの場を設け、希望や方針について確認し、多職種とご家族等で共有するよう努めている。また法人内でも終末期ケアについて勉強会を行い、事例を共有している。	入居時に「看取り指針」を家族に説明し、同意書を取り交わして終末期のあり方の希望を確認している。その時になれば、家族、主治医、看護師、職員が話し合いを重ね、希望や方針を確認し、職員の連絡体制等も整えながらチームで取り組んでいる。今までに看取りの経験があり、職員間での思いや学んだ事を今後にも繋げたいと考えている。ターミナルケアについての研修も受講している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時にも落ち着いて対応できるようにマニュアルを作成するとともに、速やかにご家族や医療職員へ連携が図れるよう連絡先一覧を作成するなど、現場職員の負担・不安を軽減できるよう努めている。また、防災訓練時に消防署員指導の救急対応やAED使用についての講習を実施している。		

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	上京消防署の協力を得て、年に2回の防災訓練(昼間・夜間想定)を実施している。毎回、地域の方々にも訓練に参加いただき、緊急時には協力を得られるよう働きかけている。また、自治会の防災倉庫を敷地内に設置し、地域の防災訓練に事業所の防火責任者が参加することで連携を深めている。	消防署の協力のもと、年2回の避難訓練を実施している。毎回地域の人々に訓練に参加してもらい、避難経路の確認や、災害ビデオを見て学んだり、消火器の使用方法、人形を使っての搬送方法を演習している。また、併設の小規模多機能事業所内にAEDを設置しており、地域に広報している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声かけ・日常会話には十分に気を配りながら、職員間でも注意し合えるよう努めている。また、法人内にてプライバシー保護に関する研修を計画しており、職員が知識を得られる機会を設けている。	法人のプライバシー研修を受講している。利用者の人格を尊重し、トイレに誘導の際には他の利用者に気付かれないように声をかけている。不適切な場面が見られた場合は職員同士が注意し合える関係が出来ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	法人内の研修にて、認知症及び認知症ケアについて学ぶ機会があり、日常のケアに活かせるよう努めている。介護現場ではご家族からの情報や職員間で話し合いながら声かけの工夫を行い、ご利用者の自発的な言葉を引き出し、自分の意思を表せる支援を心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	事前面接やご家族からの情報、ご利用者の希望を基に一人ひとりに合わせた生活のリズムを把握し、食事・入浴・散歩・買物など日常生活の支援をしている。また、その日のご利用者の体調にも配慮し、『その人らしい暮らし』の実現を目指している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご利用者の健康面、希望に応じ訪問理美容を受けることもできるが、昔から馴染んでこられたお店に通い続けることもでき、ご家族・ご利用者に選択いただいている。日々のケアの中ではお好きな髪形を職員が把握していることで毎朝ご利用者と鏡を見て確認したり、今日着る服をご利用者に選んでいただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食べたい物を聞いて献立に反映したり、近所のスーパーへの買物、野菜の皮むきなどの調理・配膳・食器洗いなど職員と一緒に作業を行い、ご利用者の能力を発揮できる場を設けることで、食を楽しんでいただくよう努めている。	昼、夜の食事は、業者から届く食材を利用しているが、朝食は買物から調理までホームで行っている。野菜の皮むき、配膳、食器洗い等利用者が出て来る事に携わってもらっている。職員も一緒に食卓を囲み、会話をしながら楽しい食事時間になっている。お正月には手作りのおせち料理と祝い箸で正月気分を味わっている。おやつは手作りを提供したり、時には好きな物を買に行くこともある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食の食事量・水分摂取量を記録し、把握している。栄養バランス等について、法人内の管理栄養士にアドバイスを求める体制がある。ご利用者に体調の変化、機能の低下がある場合は、ご本人が食べたい物・食べやすいものを食べられる時に提供できるよう努めている。		

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	生活習慣を大切にケアを実施しているため、全員の毎食後実施はしていないが、誤嚥性肺炎を未然に防ぐため、就寝前の口腔ケアに重点を置いている。個別の口腔内の状況に応じ、お一人おひとりに合わせた口腔内の清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	頻尿の方について、トイレでの尿量や水分摂取量を測定・記録する等、一人ひとりの排尿・排泄パターンを理解するために、実施したケアの記録を残し、個々にあった排泄支援に努めている。	実施したケアの記録と、利用者の様子や表情から、一人ひとりの排泄パターンを把握し、それに合った誘導でトイレで排泄できるように支援している。紙パンツから布パンツに移行できた方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘について、薬に頼るだけではなく、日頃から散歩や外出をして頂くなど活動量を増やすよう努めると共に、食物繊維が多い食事を使用したり、水分摂取方法を工夫する(ゼリー状等)ことで、自然排便を促すよう努力している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴についての今までの生活習慣を重視し、間隔・時間帯・入浴時間・同姓介助等は一人ひとりのペースに合わせて、支援している。浴室も個室となりプライバシーに配慮できる体制を整えている。他にも菖蒲湯やゆず湯など季節を楽しめる工夫をしている。	今までの生活習慣を継続できるよう入浴時間は19時まで対応している。2~3日に1度をめどに入浴してもらっており、毎日の入浴も可能である。好きな入浴剤や季節により菖蒲湯やゆず湯でゆっくり楽しんで入ってもらえる様に支援している。拒否傾向にある人には、時間を変えたり、声かけの工夫で気持ちよく入浴してもらえるように取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間に安心して睡眠をとっていただけるよう日中活動を重視し、散歩や外出をして頂くなど活動量を増やすよう努めている。また、就寝時間は決めずに一人ずつ、馴染みのもの(ベッドや布団等)を使用し、安心して休息をとっていただけるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ご利用者ごとの内服薬説明書にて使用方法・用量等について確認している。内服の変更があった時は、変更理由・内服薬・効用・注意点を連絡ノートに記入し、職員間の情報共有に努めている。症状に変化があれば、訪問看護や主治医へ報告し、指示を仰いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	事前面接、ご家族からの情報、ご利用者の希望をセンター方式シートに記入し、個々の生活歴、得意分野、好きな事に合わせた役割(掃除、新聞配り、食器洗い等)を持って頂けるよう努めている。介護現場では日々のケアのなかで、職員とご利用者が共同作業することにより、一人ひとりに合った役割や楽しみを発見できるような心がけている。		

十四軒町グループホーム(2階)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近くの公園等への散歩、スーパーへ・商店街への買物、建物裏のご神木へのお参りなど個々の希望や思いに寄り添った外出支援を行っている。ご家族と外出される際は、トイレ等の心配ごとを、ご家族へ事前に確認し、安心して外出できるよう支援している。その他、京都三大祭やお花見、紅葉狩りなど季節感を味わえる場所へも積極的に外出している。	天候や体調が良好であれば、日常的に散歩や買い物で外出している。京都の三大祭りに出かけたり、季節行事である花見やもみじ狩りで遠出することもある。日常の中でも外気に触れて刺激が受けられる様な支援をしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の協力を得て、ご利用者が昔から馴染んで使っておられた財布を使用し、金銭を自己管理されている方もおられ、花や服などをご自分で購入される事を支援している。買物の希望があれば、職員と一緒に外出できる体制を整えている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望される方は居室に電話を設置し、ご家族等と自由に連絡できるようにしている。電話をかける事、受ける事が困難なご利用者については職員が隣に寄り添い支援している。また、共有の電話にもご利用者に出て頂く事は可能であり、希望に応じて対応している。また手紙や年賀状をご利用者に書いて頂き、ご家族へ郵送したりご家族からのお手紙をお渡しする支援もしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	事業所全体では木を多用した、安心感を抱く空間になっている。フロアでは自然の光がはいりよう窓を開け、閉塞感がなく外の景色が見渡せるよう配慮して。フロア玄関には季節の花を飾ったり、季節に応じた飾り付けを行っている。台所では食事毎に調理の音や匂いがするなど、ご利用者が落ち着いて過ごせるよう、家庭的で馴染みのある雰囲気作りを心がけている。	事業所全体は木を基調にした和風の造りで畳や障子、床の間があることで高齢者の生活習慣に合わせた落ち着いた空間となっている。その時の思いや、気分に合わせてゆっくりと過ごせる場所になるようソファや椅子が効果的に配置されている。キッチンからは調理の匂いが漂い、生活感がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同生活の安心感がある中にも、ご利用者が気を抜ける、一人ひとり居心地の良い空間を作るために、ソファや椅子の配置を工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	事前面接の際に、居室へお持ちいただく家具はできるだけ昔から馴染みのあるタンスやベッドなどを使用し、できるだけ今まで生活してきた空間とのギャップが少ないようご家族等に協力を依頼している。また、家具の配置などについてもご家族・ご本人より情報を収集し、馴染みの環境づくりができるよう努めている。	好みの家具を配置し、大切な仏壇や家族の写真や人形等が飾られている。以前からの趣味を継続できるように居室の机の上に本が並べられている。家族から情報を得て、家と同じように寛げるよう工夫している。生活習慣に合わせて布団を敷いて休むことも出来る。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	館内はバリアフリーになっており、安全に生活できるよう設計させている。玄関などの段差やトイレ、浴室などには手すりを設置し、安全に配慮している。必要に応じて、照明等を工夫しながら、ご自分でのトイレへの移動をわかり易くする等、事故防止に努めている。		